みんなの学習講座

人生の書『共産主義における「左翼」小児病』に学ぶ

第４回　四国ブロック

階級による独裁を目指し　党は階級を指導する

単なる妥協は何も生まない

司会（東口）：前回第４章後半の妥協の話で、三好市職労連の組合事務所の話がありました。それに関連して、香川の林さんから話があるようですので、冒頭伺ってみましょう。

林：香川の高松にある県立中央病院ですが、２０１４年に今の場所に移転しました。移転前は労働組合の事務所が院内にありましたが、建て替え移転後の現在の病院には医者が休養する場所がないのでというような理由で院内には事務所が置かれませんでした。組合でも要求しましたが結局、組合事務所は敷地内の隅のプレハブになりました。

元々共済とか用のある方以外は事務所に来ることがないというのは三好と同じで、なかなか全員が一丸となって事務所を院内に！　とはならなかったこともありますが、実際に離れた場所になってみると、いざ何か用事ができた時や相談したいことがある時にも、今までより足を運ぶのがおっくうになり、事務所を訪ねる組合員が減りました。それだけでなく、何か闘争をするのも、組合員の状況を把握するのも後手後手になるというか、組合員からしても問題が起きてもすぐに相談できる存在ではなくなり、組合員の退職も後で知るとか、それが直接影響したのかどうかはわかりませんが、だんだんと影響が出てきたようです。

司会（東口）：組合が組合員の身近な存在でなくなり、結果的に組合の力も弱ってきてしまうということですね。まさにこれは団結阻害の攻撃であると。普通に考えると今まで庁舎内にあったものが、外に出される時点で、組合としては後退させられるということで、組合員からしても不便になるし、こちらとしては庁舎内に組合を置いといた方が市長は管理というか監視しやすい

のになとは思いますが、やはり近くにいるだけで目障りな存在なんでしょう。

岸本：第4章の21～23ページに日和見主義そして小ブルジョア的革命性に対して闘争をしてとありますが、どのような形態でたたかったのか詳しくわかりますか。

秋に竣工予定の三好市役所新庁舎。池田町時代から庁舎内に設置されていた組合事務所締め出しの危機を迎えている。

須藤：端的に言えば理論闘争です。日和見主義はダメだが、極左はいいという風潮がありますが、極左もダメであるという問題意識です。時には組織された力である暴力もあったかもしれませんが、基本的には理論をぶつけ合ったということです。先ほどの組合事務所の例もありますが、問題意識をいかに全員で持てるかが重要です。しかし、それはある意味非常に難しいことで、植え付けられた資本主義的常識というのはなかなか消えないのです。次の第5章でも出てきますが、資本とたたかうのはもちろん厳しいけども、小ブルジョアの慣習とたたかうのはもっと厳しいたたかいであり、一般常識を覆すのは非常に難しいのです。左派構造を利用して当局と結託するというのは最もやっかいな敵で最も悪であると言えます。彼らはどっちつかずな態度を取ります。日和見主義も極左主義もそういうところがあるのです。極左はロシアの例を見ても、激しい言葉を発しますが、肝心な時にプロレタリアート独裁に反対します。階級及び階級闘争という理論のぶつかりによりボリシェヴィキは成長してきたのです。

司会（東口）：では第5章に移りましょう。

第5章　ドイツの「左翼」共産主義。指導者―党―階級―大衆

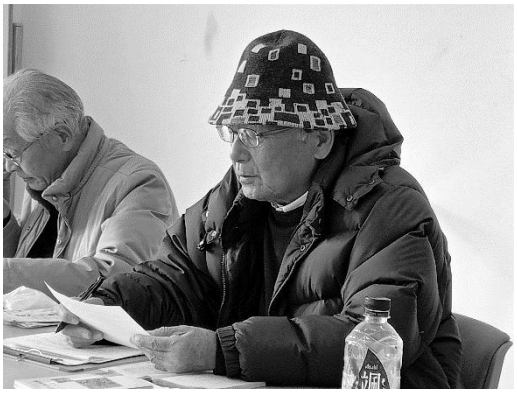
（レポート要点）

・ドイツ共産主義は「左翼主義小児病」の兆候を示している。「指導者の党」による上からの指導と、下から目標へと向かう「大衆の党」に分裂しているが、当面は原則プロレタリア階級の独裁をめざすべきであり、階級の指導をするのが政党である。

・権力を奪取した後も階級は長く残り続ける。すべてを駆逐するためには政

党と規律が必要であるが、ブルジョアジーはさまざまな手で政党を崩壊させようとする。

・多くの国でブルジョアジーは共産党内に挑発者を送り込んでいるが、これらとたたかう手段は非合法的活動と合法的活動を上手に結合させることである。



毎回レポートに挑戦する意欲的な井角さん

司会（東口）：第5章のレポーターは香川県協の井角さんです。この章で重要なことは何だと思いますか。

井角：知っていることを教条的にあれこれ言うのはたやすいが、学習はもちろん情勢等をつかんで運動していくことが大事だということ。あとは、学習の中で小ブルジョア的考え方を持っている人たちとともにたたかうためには、資本主義的常識に対する考え方を互いに粘り強く討論して引きはがしていくことが大切だということだと思います。

今の労働組合運動の中で感じるのは、労働組合を指導する社会主義政党がもっとしっかりしないといけないなと感じます。総評から連合に代わってつくづくそう思います。

ドイツの状況と党の位置づけ

須藤：ここではドイツの状況を把握しておかないとわかりにくいと思います。

１９１８年3月にブレスト＝リトフスク条約がソ連と締結されますが、その当時はドイツ帝国でした。その後１９１８年から１９１９年にかけてドイツ革命が起き、ドイツ社会民主党が政権を執ります。

しかし、不十分な政権であり、ワイマール憲法を制定して一定民主化をしますが、それに対する見解がさまざまに分かれてしまいます。政府に対してスパルタクス団というメンバー、リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグ等が反発しますが、右翼将校に惨殺されてしまいます。

この憲法の問題点は、民主的ではあるものの、緊急命令権という大統領に強い権限を持たせている部分があったのです。これは後に１９２０年代にヒトラーに利用されてしまいます。ナチスとは日本語で国家社会主義ドイツ労働者党です。非常に左派的な名前ですが、結果やったことはファシズムで、

その権限を最大限利用して事実上憲法を破壊するのです。そのようなドイツの状況がありました。

マルクスの言う本当の社会主義政党というのは、労働者階級に根付いてその上に党がある。党と労働者階級、その他の諸階級が有機的な関わりを持ちながら、政治を指導するというものですが、当時は社会主義者も動揺するような状況であったため、指導者の党か、大衆の党かなど、揺れ動いた問題の立

ソビエト連邦の国旗
鎌と金槌が交わって描かれている

て方になってしまっており、レーニンはそれを指摘したのです。

三木：42ページに「1895年のあの攻撃を思い出す」とありますが、どのような攻撃でしょうか。

須藤：1895年にレーニンは共産党の基にもなる中央集権制、厳格な規律、大衆との固い結びつきという原則に基づく労働者階級解放闘争同盟をつくります。

「闘争同盟」の活動に不安を感じたツアーリ政府は「同盟」に弾圧を加え、レーニンを筆頭に指導者と活動家約40人を逮捕しました。1897年、レーニンはシベリアの流刑地へ送られました。

労働者階級による独裁

須藤：労働者だけでは社会変革は難しく、当時は遥かに数の多い農民の力は大事でした。ソビエト連邦の国旗には農民を表す鎌と労働者を表す金槌が交わって描かれています。いわゆる労農提携を示し、ともに闘うべきであるというレーニンの考え方です。しかし、ナロードニキ主義は小ブルジョア思想であり極左的な傾向が強かったのです。

司会（東口）：反対派と言われる立場に立つパンフレットとかに書かれている内容ですが、共産党が二つに分かれて対立していくと。一つは指導者の党、もう一つは大衆の党、どちらであるべきかという議論。また、大衆による独裁なのか、党による独裁なのかという議論がなされますが、これらを議論すること自体がもう古いといって否定するわけです。

岸本：大衆というのは様々な考え方の人が混在しているわけで、そこが独裁するというのはあり得ないですよね。

須藤：マルクスやレーニンが言うのは、階級による独裁、つまりプロレタリアートの独裁ですね。指導部の独裁とか

大衆による独裁ではなく労働者階級の独裁であると。これはもう誰もが認識していることであり、今さら大衆が指導部がという議論の立て方は古いということです。

向坂逸郎先生も常に強調していたのは労働者の独裁ではなく、労働者階級の独裁であるということを言っていました。マルクス主義者のなかでは周知の事実であったということです。

政党は必要か

須藤：39ページにある注釈のなかにサンディカリストというのが出てきます。いわゆる革命的労働組合主義であり、政党は必要がなく、労働組合さえあればよいという思想です。時に激しいことを言いますが、階級的ではありません。そういった意味で無政府主義者の思想と合致するのです。

70年代に国労のなかでも中核や革労協、革マルなど色々ありましたが、彼らは彼らなりに頑張ったのかもしれません。しかし、彼らは党を認めず、ともにたたかうべき仲間もまた敵とみなしてたたかう労働組合すら攻撃しました。ドイツでも同様の過ちを侵し、それをナチスに利用されてしまうのです。

たたかいあっての妥協

井角：労働組合の方針で言えば、党と労働組合の関係について、僕らは社会党と協力関係を結んでたたかいをすすめていくべきだという主張でしたが、それこそそういった方々が入っている労働組合は、共産党と一緒に反対をしていました。

あと、先ほど妥協の問題で、どういった妥協なら許されるかという議論だったかと思います。合理化問題について、たいてい中央執行部は色々と理由を並べて妥協した方針を説明し、青年部ではそれがなかなか受け入れられないといった場面がよくよくあります。青年としては次に活かすために精一杯たたかいをすべきと組織強化の視点で声をあげるわけです。まさに幹部批判のようではあるけれども、国労では、あくまで首を切られた人たちの気持を大事にした上での妥協といいますか、それがないと次に何も活きてこないと主張しました。本部方針は四党合意でそうなったからとしか説明はなかったですが、当事者が出てこないなかでの妥協はダメだといって激しく討論したことを思い出しました。

司会（東口）：結局幹部が当局との話し合いで妥協するのと、組合員を巻き込んでたたかった上での妥協とでは、その後が全然変わってくるということですね。

大西：組織としてたたかって負けたとしても、幹部請負で妥協した結果とでは、残るものが違うと言いますか、組

織強化の点でも仲間との団結の強化や、組合員と議論をしたことは後のたたかいにも繋がると思います。

独裁＝闘いの終了ではない

司会（東口）：次に、党と党規律の否定です。テキストでは40ページ辺りになりますが、ここはどうですか。

岸本：反対派の主張は結局、プロレタリアートが武装解除するのと同じであると書かれています。革命後はプロレタリアートによる独裁が続き、ゆくゆくは党も必要なくなるのでしょうが、この段階で一足飛びに党がなくなることはあり得ないと。指導部として党とその規律という拠り所があって方向づけをしていくということがないと、当然反革命に対抗したり、革命を継続することであったり、社会変革は難しいということではないかと思います。

司会（東口）：最後に、この章でレーニンが重要視している箇所を本文からまとめます。一つ目は「大衆と階級」の問題です。ドイツ左翼共産党は独裁について混乱した問題の立てかたをしていましたが「大衆は諸階級に分かれていること。階級を指導するのは、政党であること。そして政党は、最も権威や勢力のある、経験にとんだ指導者と呼ばれる人物によって指導されているということ。これ以外にはない。」ということです。

二つ目は「党と党規律の否定」です。レーニンは「これはブルジョアジーのためにプロレタリアートを完全に武装解除するのと同じであり、これらのものを見逃がしておくと、必ずあらゆるプロレタリア革命運動を滅ぼしてしまうだろう。」と述べています。これは、（ドイツの）資本主義崩壊の前夜から、最も高い段階に一足とびにゆくことを意味し、ありえないことだと。

レーニンはロシア革命後の経験から「ロシアで（ブルジョアジーをうちたおしてから三年目だが）、資本主義から社会主義へ、つまり共産主義のもっとも低い段階へ移り変わるための第一歩を体験しているところである」と述べます。そして、プロレタリアートが権力をとった後でも、階級は至る所に、長年に渡って残ってきたと。

プロレタリアートの独裁は、旧社会の勢力と伝統とに対しての頑強な闘争であると言い、幾百万幾千万の人々の慣習の力は最も恐ろしい力である。闘争で鍛えられた鉄のような、その階級の全ての誠実な人々から信用され、大衆の気持を見守ってそれに影響を与えることのできる党なしには、この闘争を首尾よくおこなうことはできないと、ドイツ左翼共産党の主張を否定しました。つまりは革命後も階級による独裁が党を通して長年にわたり続くということです。次回は、第6章を学習・議論していきます。